

友をたずねて三〇〇〇日

東京都 中村真和（直江津町出身）

定年を間近にして、今後の人生を考えると、今までを振り返り反省することは良いことである。

最近会っていなかった昔の仕事仲間について酒を酌み交わしたり、大学や高校の恩師を訪ねたりしているうちに、小学校時代の友達にも会いたくなった。

父母は新潟県の親不知と相崎で育ち、父が高田師範学校を昭和八年に卒業（クラス会を「昭八会」という）、県下の学校を異動しているうちに結婚し、私は、父が真人（現在の小千谷市真人町）の小学校に勤務しているとき生まれたため、真人と昭和から文字を借用して「真和」としたらしい（別の説もあるようだ）。

私が三歳の春、父は直江津高校へ異動になり、高校の近くの直江津町八幡区に

住むことになった。その後、父は高田北城高校へ異動、私は直江津小学校を卒業（昭和二十七年三月）したが、中学二年の春に家族全員で東京へ移転した。

年賀状などの交換を続けていた同期生がいなかったため、お互いに音信不通になってしまった。

一九九九年度は、同期生全員が還暦を迎える年度なので、同期会が開催される可能性が大であり、今まで不義理をしていたが呼んでもらえるのではないかと考えた。しかし、連絡する手懸かりがなく、考えた末、母校を訪ねることにした。

私の記憶を頼りに、直江津小学校時代のクラス担任の先生の名前（一〜二年・岩島トヨ先生、三〜四年・佐藤幸子先生、五〜六年・清水茂夫先生）などを記載した

資料を作成して、現在の小学校の校長先生を訪ねし（九月九日、同期生へ渡していた）くださりお願いした。しかし、数か月後見つからなかった旨の電話があり、還暦時に会うことは不可能になった。

一九・九・九から始まった三〇〇〇日の旅は、まだ続いている。

二〇〇五・一〇・三〇（2244日）

「旅のつづき」を、皆さんに順次ご紹介致します。

